

《特集》シンポジウム 歴史の中の大都市

特集にあたって

小谷 汪之

歴史において大都市は、多くの場合、都城という形で出現した。都城を構えるということは、成熟した国家にとって、その証となるようなことだったのであろう。インド古典文献は都城の存在を国家にとつて不可欠のこととしている。例えば、『マヌ法典』は次のようにいう。

王、大臣、都城（プラ）、領国（ラーシュトラ）、庫、軍隊、および友邦は「王国の」七要素である。王国は七つの手足を持つものと言われる。（九・二九四。中公文庫、渡瀬信之訳）

このように、王とその大臣を中心とした官僚制、領国（領土と国民）、整備された租税制度に依拠する国庫、軍隊、同盟国と並んで、都城（プラ）の存在を国家の不可欠の属性とするのがインド古典の国家論の立場であった。しかも、これらの七つの要素は、先行するものほどより重要とされているのであるから（九・二九五）、都城は、国家にとつて、領土や国庫や軍隊よりも大切なものとみなされていたのである。

ところで、エンゲルスは『家族、私有財産、国家の起源』のなかで、国家の特徴を、以下の四点に求めている。すなわち、国民を属人的ではなく、属地的に支配すること（国民を地域によつて区分すること）、一つの公的強力としての軍隊、公権力を維持するための租税制度、公的強力と徴税権を掌握する官僚制、これらの創出、の四点である。ここで注意を引くのは、エンゲルスが都城について言及していないということである。国家は、経済的に支配的な階級が政治的にも支配する階級になるための「用具」であるとするエンゲルスの抽象理論としての国家論にとっては、都城のような具体

的な国家装置に言及することは必要だったのであろう。

しかしながら、国家を歴史の中において具体的に考える時には、都城というものを無視することは到底できない。都城は単に物理的な国家支配装置の中心に位置していただけない。都城はイデオロギー的にも世界の中心をなすものであったから、都城のあり方はある一定の世界観を表現していたのである。だから、都城の地形、位置、方位などの選定は国家にとって死活の意味を持つことになった。

近世・近代の時代になると、多くの都城は大都市、近代的都市へと変貌していく。それは都市問題というそれまでに経験されたことのなかった問題を生み出すことになった。都市問題は単にインフラストラクチャーの問題ではなく、人と人との関係の激変もまた都市問題の重要な側面をなしているのである。都市問題はいわば文化の問題なのである。

本特集では、そのようなものとして大都市の歴史的あり方を、日本（藤原京、江戸）、中国（長安、北京）および近代のバリを事例として追求する。